

小特集「パターン情報処理」を編集するにあたって

棟上 昭 男* 長 尾 真**

「パターン情報処理」という少々耳慣れない言葉が使われはじめてからやや久しい。それまでの古典的なパターン認識研究に、情報処理の技術開発を結びつけた国のプロジェクトが開始されたときに使われたのが恐らくその始まりであろうが、最近ではさほど奇異な響きも持たなくなってきたように思える。小特集にこのテーマがとりあげられることになって、その編集のとりまとめを引き受けることになったとき、当然のことながら、その内容形態と、どのような分野のものまで収録すべきかということが問題となった。

比較的最近にも他の学会誌や商業誌に、これに似た企画のものがあったこともあり、それらと重複するような内容のものにすることは避けるようにしたい、というのがかなり強い動機となって、今回はここに見られるようにオリジナル寄稿を中心とする小特集号とすることになった。この点に関しては編集委員会でも異論がなかったわけではないが、それとは別に編集技術的にみても、このようなオリジナル寄稿中心の特集というのは当学会でも未経験であったし、原稿募集要綱の発表から、投稿、査読、会誌発行までに許される期間が8ヵ月余りしかなく、投稿数やその分野ごとのバランスなども不明であるという不安要素がかなりあったことは否めない。

結果的には27件の投稿申込みがあり、そのうち23件の原稿が実際に届けられた。これらと締切り時点での関連する一般投稿論文・資料をあわせて約30件を小特集の候補原稿とし、6名の査読委員による集中査読を行って、その結果をもとに内容原案を作成し、編集委員会の承認を得て現在の内容のものとしたわけである。

とりあげた分野は、採録できる論文数の制限もあっ

て、結局狭い意味のパターン認識の分野からあまりとびだすことはできなかったが、それなりにこの分野の最新的话题を提供し、国内における研究開発の進展状況の一端を示すことができたのではないかと考えている。もち論ここにとりあげた分野以外にも重要なテーマはいくつもあるし、また音声関係の論文を一編しか採用できなかったことは少々気になる点の一つであるが、このような不足部分については今後の研究発表に期待することにした。

最近では当学会に限らず学会誌一般への批判が少なからずあるようで、論文の読み易さに満足なものが少ないとか、解説のように多くの会員に読まれるような記事を増やすべきだといった意見をしばしば耳にする。このような意見にはもち論反対もある。学会誌が商業誌と同じようなペースで競いあってよいのだろうかというような疑問である。

今回の小特集は、このような議論に対する一つの問題提起でもあるわけで、生の研究成果を通して特定の分野の現状や、動向といったものをよりリアルに示すこともできるのだという見本にしたい、という願いが込められている。論文にせよ、解説にせよ、要は読者に目を通す気を起こさせ、しかも実際に読んで得るところのある記事にすることが最も大切なことであろう。この小特集がそのような意味においても新しい一歩となることを期待したい。

終りにこの小特集を編集するにあたり、相磯前編集担当常務理事および伊吹編集担当常務理事をはじめとする編集委員の方々の熱心な御討議と御協力、また多忙の中を短い期間で論文・資料の査読を完了していただいた査読委員の方々の御協力があつたことを付記し、厚く感謝する次第である。

(昭和51年5月25日)

* 電子技術総合研究所ソフトウェア部情報システム研究室

** 京都大学工学部電気工学教室